# 記憶発達研究の教育への貢献

## 子どもの学習支援に関する基礎研究からの示唆

企　画　者　豊田弘司（奈良教育大学）
橋本憲尚（佛教大学教育学部）
話題提供者　上原　泉（お茶の水女子大学）
近藤　綾（園田学園女子大学）
豊田弘司（奈良教育大学）
指定討論者　藤木大介（愛知教育大学）
橋本憲尚（佛教大学教育学部）

**企画趣旨**　記憶に関しては、認知活動の中心的位置づけがなされているにも関わらず、発達的研究が乏しい。しかし、1970年代から現在までの記憶の発達に関する基礎研究を展望すると、現代の研究の枠組みが明確に読み取れる。そこで、本シンポジウムは、記憶の発達に関する基礎研究の理論とその実験的証拠を振り返り、その学問的意義および教育への貢献の可能性を検討する。

### 幼児期の自伝的記憶とメタ記憶の発達

上原　泉（お茶の水女子大学）

メタ記憶的機能は言語活動に依存する部分が大きい。５歳未満の幼児では自己の記憶を言語化することが容易ではなく、記憶ストラテジーやメタ記憶的知識が未発達であることから、幼児期のメタ記憶的機能に関する研究数はいまだに乏しい。幼児期の言語能力や心の理論の獲得状況と５歳以降の言語能力やメタ認知的知識の関連性を追究し始めている研究が少数みられるものの(Locks & Schneider, 2006, 2007)、５・６歳以降のメタ記憶的機能の獲得にいたるまでの幼児期の認知発達の過程は明らかではない。著者はこれまで、幼児を対象に学習や記憶課題を複数実施し、３・４歳頃の発達的変化を中心に提示してきた(Uehara, 2000a, 2000b, 2004; 上原,2006等)。近年、著者は、５・６歳以降のメタ記憶の発達にどうつながっていくのかという視点から、その前提となる、幼児期の自分の記憶に対する意識や語る能力の発達過程(自伝的記憶が芽生える過程)を中心にデータを分析、整理しなおすとともに、新たな課題により、幼児におけるメタ記憶的機能を検討している(上原, 発表予定)。その結果、記憶内容の言語的表出が先行する形で、「知る」「覚えている」の順で自己の記憶状況を示す動詞の自発的使用が４歳頃までに可能になるにもかかわらず(上原, 2008等)、他者における「知っている」や「覚えている」という状況の理解は５歳以降にならないと難しい可能性が示されつつある(上原, 発表予定)。比較のため、Locksらの課題の１つ(Locks & Schneider, 2006, 2007) を改変し、「ものを置き忘れた」ことに対する理解も検討しているが、課題間の年齢差はあるとはいえ、同様に５歳未満で難しいことが示唆されている。後のメタ記憶的機能の発達の前提となる、このような知識や記憶への意識や認識は、他者との交流を通じて発達していく。人間関係の希薄化により、他者との交流がなされにくくなっている状況下では、これらの発達への配慮が必要であると思われる。乳幼児期に経験したことの記憶、幼児期の自己の知識や記憶状況への意識の発達、他者との知識や記憶の共有感は、児童期の記憶や学習の発達に直結している。本話題提供では、それらの幼少期の発達過程と教育的貢献について考察する。

### 幼児におけるソースモニタリングの発達

近藤　綾（園田学園女子大学）

ソースモニタリングとは、情報源の記憶の想起に関する認知プロセスである。Johnson, Hashtroudi, & Lindsay (1993) は、ソースモニタリングの理論的枠組みを提唱し、次の３種類に分類している。第１は、外的に得られた情報の情報源を識

別する外部情報のソースモニタリング(例: ある情報をAから聞いたのか、Bから聞いたのか)、第2は、内的に得られた情報の情報源を識別する内部情報のソースモニタリング(例: 夢で見たのか、想像したのか)、第3は、情報源が外的か内的かを識別するリアリティモニタリング(例: 実際に鍵を閉めたのか、閉めようとしただけなのか)である。

3つのソースモニタリングの中でも著者は、外部情報のソースモニタリングにおける“誰が言ったのか”という発話者の識別に着目して研究を行ってきた。これまでの研究からは、外部情報のソースモニタリングが4-6歳の幼児期に急速に発達すること、情報源の類似性が発話者の識別に影響を及ぼすことが明らかにされている。著者は、これらに加えて、音声提示や映像提示といった情報源の提示形態の要因と、単語・文・文脈といった提示情報の要因を取り上げ、これらの影響と年少児・年中児・年長児のソースモニタリングの発達的変化を検討した(近藤, 2008, 2009, 2010a, 2010b; Sugimura & Kondo, 2009)。

その結果、提示形態に関して、年少児や年中児は音声提示よりも映像提示のほうがソースモニタリングの正確さが増すことが示された。提示情報については、年中児以降の情報量や文脈の利用が成人と同様の傾向へと発達していくことが示された。また、年齢とともにソースモニタリングの正確さが増すという発達的変化が示唆された。

本話題提供においては、これらの要因を中心とした基礎研究を報告する。というのも、ソースモニタリング研究は、理論を構築するための積極的なデータ収集を行っている段階にあり、発達に関する基礎的メカニズムの詳細は十分に明らかにされていないからである。しかし日常の中では、子どもにとってもソースモニタリングが重要になるときがある。よって、このような基礎研究を踏まえた上での教育への貢献の可能性を考えたい。

## 児童における文脈利用と記憶の発達

豊田弘司（奈良教育大学）

DeMarie & Ferron（2003）は、児童期における記憶成績に貢献する要因として、記憶容量、記憶方略及びメタ記憶をあげ、これらの要因が研究の枠組みになっている。しかし、著者(Toyota,2000)は、上記の3つの要因とは異なり、記銘語が提示される文脈を利用した符号化の発達的変化を明らかにしてきた。記銘語を意味的限定性の強い文によって提示する場合と弱い文によって提示する場合を比較すると、小学2年生ではこの両文間に記銘語の記憶成績の差は見られない。しかし、6年生では意味的限定性の強い文で提示された場合が、弱い文で提示された場合よりも記銘語の記憶成績が良くなったのである。この結果は、文脈の意味的限定性を利用した符号化における発達的変化によるものと考察された。ただし、大学生においては、両文間に記銘語の記憶成績の差がなくなった。この結果は、文脈の意味的限定性が弱い文であっても、大学生になれば、自発的に文脈を限定できる能力があることを示唆している。文脈のもつ意味的限定性だけでなく、統語的限定性を操作した場合においても同じような発達的変化が見いだされている(Toyota, 2001)。

また、記銘語に関連する情報に関する選択肢を設けるという文脈では、その有効性が小学6年生よりも2年生の方が大きいことを見いだしている(Toyota, 2004; Toyota & Tatsumi, 2003; Toyota & Konishi, 2004)。さらに、記銘語に対して不適合文を提示してその修正情報の生成を求めるという文脈を設定した場合には、小学6年生における修正活動による記憶促進の効果が2年生におけるそれよりも大きいことが示されている(Toyota, 2007)。ただし、この修正情報を選択させる場合には、反対に小学2年生においてその効果の大きいことが明らかになっている(Toyota, 2010)。このように、文脈利用による符号化の有効性は、発達段階によって異なっている。学校教育においては、様々な文脈が提供されているが、児童・生徒の学習を促進するためには提示される文脈の活用が重要である。本話題提供においては、そのような文脈活用の教育的貢献について考えてみたい。